ＫＯＢＥの本棚

第　78　号　　平成26年11月20日
編集・発行　**神戸市立中央図書館**
〒650-0017神戸市中央区楠町７－２－１ (078)371-3351

須磨離宮公園

武庫離宮

須磨区の離宮公園。かつてはここに、皇室の別荘「武庫離宮」がありました。

もとは西本願寺法主大谷光瑞の別荘地でしたが、離宮を造営する計画が持ち上がり、土地、建物を宮内省が買い上げました。

明治四十四年に離宮の造営に着工し、大正三年十二月に完成しました。今から一〇〇年前のことです。庭園設計をした福羽逸人（ふくばはやと）は「各所に離宮、御用邸ありと雖（いえど）も、武庫の如き風景佳絶なるは無し。」（『福羽逸人回顧録』）と、この地を絶賛しています。

武庫離宮は昭和二十年三月の神戸空襲で焼失。終戦後、敷地は神戸市に下賜されました。その後米軍に接収、返還されたのち、昭和三十三年、現在の天皇陛下のご成婚記念に公園として整備され、同四十二年に須磨離宮公園として開園しました。（『日本公園百年史』他）

数奇な運命をたどりましたが、今は四季を通じて市民の憩いの場になっています。また、平成元年には「日本の都市公園一〇〇選」にも選ばれています。

神秘　白石一文（毎日新聞社）

がんで余命一年を宣告された主人公菊池三喜男。二十年前の不思議な体験。そのもととなった女性に会うために、彼女が住むという神戸の地を訪れる。人探しをする中で過去の自分と残されたこれからの人生に思いをはせる。

中央図書館や人と防災未来センター等、実在の施設を利用する描写が克明。神戸の街並みが思い浮かぶ小説である。

うまいもん探偵の味噺　神戸たべある記　食総合研究所

「食総合研究所」（通称：うまいもん探偵団）の創立二〇周年記念出版。前著『うまいもん探偵の味噺　神戸のグルメ今昔』（神戸新聞総合出版センター刊）は神戸の味の今昔を紹介。十二年ぶりの今作では現在味わうことのできるお店をカラー写真付で掲載している。グルメ案内だけでなく地元神戸のお店を応援する姿勢が温かい。

鈍足バンザイ！　僕は足が遅かったからこそ、今がある。　岡崎慎司（幻冬舎）

兵庫県のサッカー強豪校である滝川第二高校出身で、現在ブンデスリーガに在籍、日本代表チームの点取り屋としても活躍する岡崎慎司。実は彼は足が遅い。小柄で、抜きんでたテクニックもない。そうした欠点を抱えながら、コンプレックスをどう克服しトッププレーヤーに成長できたのか、その思考法が語られる。

小林一三　時代の十歩先が見えた男

北康利著　（ＰＨＰ研究所）

阪急電鉄の創業者で宝塚歌劇団の生みの親でもある小林一三は、沿線の住宅開発や娯楽施設、百貨店経営など多角的な鉄道事業経営の先駆者でもあった。

「金がないから何もできないと言う人間は、金があっても何もできない人間だ」と語る小林が、いかに無から有を生みだし、夢を実現していったかに迫る。

温泉学入門～有馬からのアプローチ

古川顕（関西学院大学出版会）

日本には、温泉が全国的に数多く存在している。中でも有馬温泉は多くの人が湯治に訪れ、『日本書記』など古い文献にも登場するほど昔から有名であった。

第三章では文政十年（一八二七年）に出版された『滑稽有馬紀行』を元に、江戸時代の有馬温泉の様子をいきいきと描いている。

また名湯日本一をめぐる有馬と城崎の争いのてんまつは興味深い。

さらに全国の温泉の違いや、日本の温泉の歴史、「温泉法」の定義など、様々な観点から温泉を考察した入門書である。

素顔の孫文　国父になった大ぼら吹き　横山宏章（岩波書店）

辛亥革命の主導者として知られ、中国においては「国父」と呼ばれる孫文（孫中山）。五十八才で亡くなる前年の一九二四年末に神戸を訪れ、有名な講演「大アジア主義」を行うなど当地にも縁が深い。

これまでは偉大なる革命者としてあがめ奉られてきたが、近年に至り、ようやく客観的な歴史的評価が加えられるようになってきた。本書も「孫文の偉業を顕彰する本ではない」と後記で断るように「孫大砲」（大ぼら吹きの孫）ともあだ名された孫文について、確実な史料にもとづき英雄伝説の虚飾を除去した評伝となっている。来年は孫文没後九十年。真実の姿により近づいた孫文伝である。

灘の蔵元三百年　国酒・日本酒の謎に迫る　西村隆治（径書房）

「今、日本酒が新しい」「日本酒の歴史と文化」ほか七章にわたり作法から業界事情まで様々な角度からアプローチ。「沢の鶴」十四代目、日本酒の発展を願う著者の活動の軌跡ともなっている。

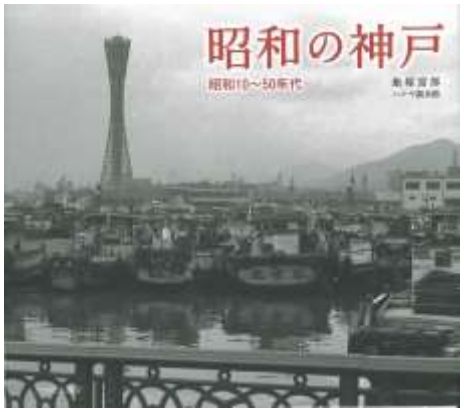
目次には「まずい米からうまい酒」「酵母はモーツァルトを喜ぶ？」といった愛好者でなくとも興味をそそられる項目も並ぶ。

杯を手に日本酒の世界にじっくりと浸ってみては如何。

昭和の神戸　昭和10～50年代　飯塚富郎、ハナヤ勘兵衛（光村推古書院）

この写真集は三章からなり、一、二章は飯塚氏撮影による昭和三十年代から五十年代の神戸各地の様子を、三章はハナヤ勘兵衛氏が撮影した戦前戦後の神戸港や三宮の様子が収録されている。

港にたくさんの艀（はしけ）がひしめく様子や、原っぱの土管で遊ぶ子供、写っている人物の服装など、当時の風俗がうかがえる。また、百貨店など、今と変わらない風景も取り上げられ興味深い。



ノー・シューズ　佐々木マキ（亜紀書房）

著者は、神戸生まれのマンガ家・絵本作家。第一章は、『ガロ』誌面で腕を競ったマンガ家たちや編集長との交流、絵本『やっぱりおおかみ』誕生のいきさつなどを記す。

第二章は一コママンガ集。第三章には二五年前のエッセイを再録し、一九五〇～六〇年代、新長田での子ども時代が綴られる。年の瀬の六間道（ろっけんみち）商店街、新湊川の氾濫、駒ヶ林の精霊流しなどの思い出。震災とその後の再開発で変貌した街のかつての姿が活写される。世間に馴染もうとせず、でも好きなものは沢山あってという少年の目を通した神戸である。

＝その他の新刊＝

新修神戸市史　産業経済編４　総論　新修神戸市史編集委員会（神戸市）

八雲の妻―小泉セツの生涯　長谷川洋二（今井書店）

西東三鬼自伝・俳論（沖積舎）

神戸紅茶さんぽ―日本屈指の紅茶の街で、最上級の紅茶と出会う（グラフィス）

続・御影町史（御影地区まちづくり協議会）

神戸あんな人こんな人　その ②

福羽逸人　安政３年(1856年)　～　大正10年(1921年)

福羽逸人（ふくば　はやと）は、明治期の園芸学者です。園芸技師として長く宮内省に勤め、野菜、果実、花の品種改良と栽培方法の研究に功績を残しました。日本初のイチゴ品種である福羽イチゴの開発者としても知られています。また、宮内省管轄の庭園の整備・設計にも携わり、新宿御苑の改修事業では総指揮を取りました。彼は、神戸に二つの足跡を残しています。日本で最初のオリーブの栽培と武庫離宮（現須磨離宮公園）の庭園設計（表紙下参照）です。

明治 12(1879)年、山本通二丁目にオリーブ栽植の試験場が作られました。当時、福羽は播州ブドウ園に勤務していましたが、同時にオリーブ園の管理も任されます。開園から４年後には、オリーブ油の搾油に成功し、塩漬けも作製していました。その後、オリーブは小豆島で栽植され、この島の特産物となりました。福羽は、後年武庫離宮を設計する際、庭園の植栽としてオリーブの樹を選んでいます。回顧録の中でも、庭園内のオリーブについて言及があり、オリーブへの思いが窺えます。

ランダム・ウォーク・イン・コウベ㊽

生糸とKIITO（きいと）

本年六月、国内で十八番目のユネスコ世界遺産として「富岡製糸場と絹産業遺産群」が登録されました。「高品位生糸の大量生産をめぐる日本と世界の文化交流を評価」がその理由です。かつて神戸にも絹輸出に活躍した施設がありました。神戸生糸検査所です。

明治政府にとって絹は重要な輸出品だったのですが、国際競争に勝つには、価格の安定と品質管理が重要となります。このため日本政府は明治二十九年に国営の生糸検査所を神戸（六月・中央区栄町番外二一番）と横浜（八月）に開設しました。しかし、神戸の検査所は明治三十四年三月、検査量減少を理由に閉鎖になります。前年の、両検査所の生糸検査数量は、横浜の一一、一九〇件に対し、神戸はわずか五八三件でした。開港時期の早い横浜は、すでに国際港としての地位を築いており、東北、関東・甲信地方に大きな養蚕・製糸の後背地を持ち、絹産業の資本力や金融システムなど神戸とは大きな差があり、横浜と並ぶ生糸輸出の中心とはなりませんでした。

大正時代にはいると西日本地域での養蚕業が盛んになり、生産量は関東と肩を並べるまでになり、品質もニューヨーク市場で「関西優等品」という銘柄で特別扱いを受けるまでになってきました。神戸に生糸検査所を復活し神戸を生糸輸出港とする機運が高まり、大正十年七月、神戸商業会議所は、生糸検査場設置委員会を設置します。大正十二年九月一日の関東大震災は首都圏に壊滅的な被害をもたらします。横浜も多大な被害を受け、横浜港は港湾機能を失い、横浜生糸検査所も内部と大量の繭糸在庫を焼失してしまいます。

この事態に神戸が立ち上がります。同年九月五日、神戸商業会議所は生糸検査所の設置を決議。十二日、神戸生糸貿易に関する全国製糸業者大会を開催し、「横浜の早期復旧」とともに「応急策として神戸港より生糸の輸出を為すこと」が満場一致で決議されます。十五日の神戸市会も市立生糸検査所の設置を決議し、十一月七日には、神戸税関監視所跡に検査所を急設します。さらに、十三年一月に市は、市立検査所条例を公布、即日施行し、業務を開始します。震災を逃れて多くの商社も神戸に来るようになり、神戸からの絹輸出が盛んになってゆきます。

この「市立」検査所は昭和二年、国の代行検査所に指定され、昭和六年には、再び、国の機関となりました。しかし、昭和五十二年頃から、検査業務は民間業者へ委譲となり、五十五年農林水産省設置法の改正で、生糸検査業務は農林規格検査所に吸収され、神戸生糸検査所の名前は消えました。

神戸大空襲や阪神・淡路大震災をくぐりぬけた建物は、中央区小野浜町に二棟残っています。道路に面した、いわゆる「旧館」は市立生糸検査所として昭和二年七月に竣工（神戸市営繕課設計）しました。鉄筋コンクリート四階建、左右対称の建物は、正面中央に塔がそびえ、正面玄関のとがりアーチの上には、蚕の頭を模したといわれる飾りがついています。明るい黄土色のタイルと縦のラインですっきりとした印象。東側にあるのが、国営化後に増築された「新館」で、昭和七年五月に竣工（置塩章設計）しました。同じ鉄筋コンクリート四階建ですが、角に四角い塔を持つ、ネオゴシック様式。茶色のスクラッチタイルを使うなど、旧館と対照的に、重厚な印象の建物です。

建物は独立行政法人農林水産消費技術センターが使用していましたが、平成二十四年、この建物に新たな命が吹き込まれます。

神戸市は平成二十年、ユネスコのデザイン都市に認定され、旧神戸生糸検査所の建物はこの活動の拠点となりました。デザイン都市・神戸の創造と人材の育成・集積・交流の拠点として平成二十四年八月、デザインクリエイティブセンターKOBEとなりました。愛称は建物の歴史にちなんでKIITOです。ここでは、芸術分野だけでなく、食や震災など幅広いジャンルでイベント、ゼミやワークショップなど企画され人々が学び、集う場となっています。特に、子どもを中心に据えた「ちびっこうべ」活動が活発に行われています。

生糸検査所時代の機械も残されていて往時の姿をしのぶこともできます。今、歴史ある建物が、新しい文化の発信の場となっています。

参考文献
『開港とシルク貿易』（世織書房）
『神戸生糸検査所史』（神戸農林規格検査所）
『神戸商工会議所百年史』　ほか

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

神戸市広報印刷物登録　平成26年度第148-2号
（広報印刷物規格　B-1）